ヘンリー6世治世における薔薇戦争

川　瀬　　進

目　次

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．ランカスター王家の内紛
Ⅲ．オルレアンの攻囲
Ⅳ．ヘンリー6世の立場
Ⅴ．ヨーク公のクーデター
Ⅵ．おわりに

Ⅰ．はじめに

14世紀中期ごろからイングランドは，断続的に対フランス戦争を行っていた。いわゆるフランスの王位継承を巡って，15世紀中期ごろまで続いた百年戦争（Hundred Years' War, Guerre de Cent Ans, 1337-1453）である。

この百年戦争は，フランスの王位継承問題に，フランスでのイングランド領，しかも羊毛工業において高収入が上げられていたフランドル（Flanders）での領有権問題が複雑に絡み合い，断続的に行われた戦いであった。

当時のイングランド王エドワード3世（Edward Ⅲ, 1327-1377），リチャード2世（Richard Ⅱ, 1377-1399），ヘンリー4世（Henry Ⅳ, Bolingbroke, 1399-1413），ヘンリー5世（Henry Ⅴ, 1413-1422），ヘンリー6世（Henry Ⅵ, 1422-1461, 1470-1471）が，この百年戦争にかかわっていた。

ヘンリー6世治世時での1430年ごろまでは，イングランド軍の方が優勢で，イングランドがフランスの北部および南部地方を占領していた。

だが，フランスでのジャンヌ・ダルク（Jeanne d'Arc, 1412？-1431）の

出現により，形勢は，逆転した。すなわちイングランドは，フランス王シャルル7世（Charles Ⅶ, le Victorieux, 1422-1461）から軍隊を委ねられたジャンヌ・ダルクによって，1429年にフランスでのイングランド領オルレアン（Orléans）を奪還されてしまった。

このオルレアンの喪失によってイングランドは，しだいに劣勢に立たされ，カレー地を除いて，ほぼフランスでのイングランド領を，フランスに奪還されてしまった。

このことが原因で，その後イングランド国内で内戦が勃発した。いわゆるランカスター王家とヨーク王家との2派に分かれて戦ったイングランド大内乱の薔薇戦争である[1)]。

この薔薇戦争は，ランカスター王家が紋章的に赤い薔薇のバッジを身に付け，またヨーク王家が紋章的に白い薔薇のバッジを身に付けて戦った内戦であった[2)]。

ただしこの薔薇戦争という名前は，テューダー朝まで使用されておらず，19世紀の詩人および小説家であったサー・ウォルター・スコット（Sir Walter Scott, 1771-1832）によって最初に用いられた。また赤薔薇，白薔薇というようにはっきりと区別させたのは，16世紀，両家を合体させたテューダー王家である。というのは，テューダー王家がバッジにランカスター王家の赤い薔薇と，ヨーク王家の白い薔薇を採用したからである。

当時，確かにヨーク王家は，紋章学的に赤薔薇のバッジを使用していた。だが，ランカスター王家は，紋章学的に白薔薇のバッジをほとんど使用しておらず，多くの封建貴族は，白雄鹿と王冠をかぶった白鳥のバッジを，身に付けていた[3)]。またランカスター王家とヨーク王家との薔薇戦争において，まさに薔薇を手に取り，両家が憎しみ合う絵，今にも薔薇戦争の幕が切って

注1）Fry, P. S., *The Kings and Queens of England and Scotland,* Repr. of 1990, ed., A Dorling Kindersley, 1993, p. 80.

2）Woodward, E. L., *A History of England, Repr*. of 1965, ed., Cambridge University Press, p. 53. n. 1.

3）*Ibid.*, p.53. n. 1.

落とされるような絵を，画家ピーネ（Pyne, H. A.）は，鮮やかな色でもって描いている[4]。

では，1455年から1485年にかけて，ランカスター王家とヨーク王家との間で戦われた薔薇戦争とは，いかなるものであろうか。

この薔薇戦争には，ランカスター王家のヘンリー6世，ヨーク王家のエドワード4世（Edward Ⅳ, 1461-1470, 1471-1483），さらにヨーク王家のリチャード3世（Richard Ⅲ, 1483-1485）がかかわっている。

ヘンリー6世は，百年戦争と薔薇戦争とを実際に体験したイングランド王である。もしヘンリー6世が，フランスから撤退する兵士の取り扱い方を間違っていなかったならば，薔薇戦争は起こっていなかったであろう。また，もしヘンリー6世が，自分を取り巻く側近たちに主導権争いをさせていなかったならば，特に3代目ヨーク公リチャード・プランタジネット（Richard Plantagenet, 3rd Duke of York, 1411-1460）にクーデターを起こさせていなかったならば，この薔薇戦争はなかったであろう。

そこで本稿では，フランスから撤退した兵士の立場を解明するとともに，ヨーク公のクーデターから薔薇戦争の1原因を解明する。

Ⅱ．ランカスター王家の内紛

ヘンリー6世は，1421年12月6日に生まれて，そしてその後わずか9ヵ月で，イングランド王位を継承することになった[5]。またヘンリー6世は，1420年5月21日のトロアの条約（Treaty of Troyes）で，フランス王位も継承することになっていた[6]。生後9ヵ月のヘンリー6世にとって，イングラ

4）Andrews, A., *Kings and Queens of England and Scotland*, Repr. of 1976, ed., Marshall Cavendish, 1994, p. 83.

5）Cannon, J. and Griffiths, R., *The Oxford Illustrated History of British Monarchy*, New York : Oxford University Press, 1988, p. 206.

6）Oman, C., The History of England, from the Accession of Richard

（次頁脚注へ続く）

ンドの国政をつかさどることは，不可能である。

そこでイングランド議会は，1422年35歳の若さで他界したヘンリー5世の遺言に従い，その内容を協議し始めた[7]。すなわちその協議の内容は，幼王ヘンリー6世のために，誰を摂政に置くか，であった[8]。

ヘンリー5世の遺言によると，ランカスター王家直系の，しかも自分の弟であるベッドフォード公ジョン（John, Duke of Bedford）をフランスでのイングランド総督に，また自分の末弟であるグロースター公ハンフリー（Humphrey, Duke of Gloucester）をイングランドの摂政に当てることであった。グロースター公ハンフリー自身も，摂政に置かれることを期待していた[9]。だが，イングランド議会の決定は，ハンフリーの兄ジョンをイングラ

II. to the Death of Richard III. 1377-1485, in William Hunt and Reginald L. Pool, eds., *The Political History of England*, Vol. 4, Longmans, Green, and Co., 1906, p. 277.

• 1420年のトロアの条約とは，軍事的優位であったヘンリー5世が狂気のフランス王シャルル6世（Charles VI, le Bien-Aimé, 1380-1422）に，強引に結ばせた屈辱的な条約である。すなわち，ヘンリー5世がフランス王位を継承すること，狂気シャルル6世の生存中，ヘンリー5世がフランスの摂政にあること，ヘンリー5世が狂気シャルル6世の娘カトリーヌ（Katharine）を自分の王妃にすることであった。もともとこの条約の経緯は，1417年ヘンリー5世がノルマンディーの首都ルアーンを占領していた時に，フランスでの内紛，すなわちアルマニャック派（Armagnacs）とブルゴーニュ派（Burgundians）とがお互いに権力闘争を激化させていたことによる。この権力闘争の解決のため，1420年に狂気シャルル6世の息子であり，アルマニャック派の代表である王子シャルル（後のシャルル7世）と，ブルゴーニュ派の代表ブルゴーニュ公ジョン（John, Duke of Burgundy）とが橋上で話し合いに入った。この時，狂気シャルル6世の王子がブルゴーニュ公ジョンを殺害してしまった。これに怒ったジョンの息子フィリップ（Philip le Bon, Duke of Burgundy）が，公然とイングランドのヘンリー5世を支持するようになった。このことによりブルゴーニュ派が支持するヘンリー5世 vs. アルマニャック派の代表シャルル6世の王子という構図が出来上がってしまった。なおこの1420年のトロアの条約により，ノルマンディーは，イングランドの領地となった。

7）Jacob, E. F., The Fifteenth Century 1399-1485, in Sir George Clark, ed., *The Oxford History of England*, Vol. 6, Repr. of 1961, ed., Oxford University Press, 1978, p. 211.

8）Oman, C., *op. cit.*, p. 287.

9）Jacob, E. F., *op*. cit., p. 211.

ンドの保護卿（Protector of England）として，摂政に指名した[10]。というのは，ハンフリーが利己的で横柄で，そしてあら捜し好きなため，諮問会議のメンバーから嫌われていたからである[11]。

イングランド議会は，摂政のNo. 1の地位をベッドフォード公ジョン，No. 2の地位をグロースター公ハンフリー，そしてNo. 3の地位を，ヘンリー6世の後見人としてランカスター王家傍系のウィンチェスター司教ヘンリー・ボーフォート（Henry Beaufort, Bishop of Winchester）に付けた[12]。

この後見人の司教，ウィンチェスター司教ヘンリー・ボーフォートは，後に枢機卿になった人物であり[13]，また摂政No. 1の地位であるべきグロースター公ハンフリーをNo. 2の地位にした人物でもある[14]。

ここで1つ注意して置かなければならないことがある。それは，グロースター公ハンフリーとウィンチェスター司教ヘンリー・ボーフォートとの関係である。イングランドの摂政に当たってグロースター公ハンフリーは，ウィンチェスター司教ヘンリー・ボーフォートを中心とする諮問会議から，兄ベッドフォード公ジョンがフランスに出陣中に限って[15]，摂政No. 1の地位を与えられていた[16]。当然，兄ベッドフォード公ジョンがイングランドに帰国したら，再びグロースター公ハンフリーは，No. 2の地位に戻った。いいか

---

10) Oman, C., *op. cit.*, p. 288. ●なおベッドフォード公ジョンの保護卿の職は，ヘンリー6世が1429年11月6日に戴冠式を行うまで続けられた。
11) Oman, C., *op. cit.*, pp. 287-288.
12) Hallam, E., General Editor, *The Chronicles of the Wars of the Roses*, London : Weidenfeld and Nicolson, 1988, p. 163.
13) Oman, C., *op. cit.*, p. 300.
14) Jacob, E. F., *op. cit.*, p. 212.
15) ベッドフォード公ジョンは，フランスの出陣中にかなりの成果を上げていた。すなわち相手方に1,200人もの戦死者を出させた1423年8月1日のクルヴァンの戦闘（Battle of Cravant），および戦いの2日目に7,262人もの戦死者と捕虜を出させた1424年8月17日のヴェルヌイユの戦闘（Battle of Verneuil）で勝利した。これらの勝利後イングランドは，メーヌを征服し，そして着実にオルレアンの重要な都市を攻略し始めた。(Oman, C., *op. cit.*, p. 291 and p. 295)
16) Jacob, E. F., *op. cit.*, p. 216.

えるとグロースター公ハンフリーは，1422年の諮問会議によって，ただ単に名目上の摂政に置かれていたのにすぎなかった[17]。

このことによってグロースター公ハンフリーとウィンチェスター司教ヘンリー・ボーフォートー枢機卿との関係は，非常に険悪なものになっていた。この険悪な関係は，1425年10月29日にクライマックスに達した[18]。

「1425年10月25日，グロースター公は，ロンドンの新市長ジョン・コベントリーや市参事会員たちに使いを出した。そして彼らに対して‘今夜ロンドン・シティを安全に守るように，また待機するように’嘆願した。グロースター公は，30日，不意の1撃がサウスワーク側から起こる計画を知らされていた。その時，ボーフォート側の人びとは，ロンドン・シティ内に自分たちの道を押し進めるために，おそらくロンドン塔を奪取するために，後に王の領地を拡大するために軍隊を準備していた。午前9時と11時の間，ボーフォート側の軍事力（騎士とスクワイア）は，ロンドン・ブリッジの南端の鎖と障害物とを取り除き，その上に建っている建物から射手のための陣地を占めていった。ニュースが街中に広がり，店はシャッターをおろし，1時間以内に市民たちは，ロンドン・ブリッジの方へ殺到した。この時点でカンタベリー大司教チチェレ（Chichele）とグロースター公のいとこであるポルトガル王子ペーター（Peter）とが，…仲裁に入った。仲裁者の行動として彼らは，衝突の恐れが取り除かれるまで，グロースター公とボーフォートとの間を，絶えず行き来しなければならなかった。」[19]

仲裁の労をとったカンタベリー大司教チチェレのおかげで，グロースター公ハンフリーとウィンチェスター司教ヘンリー・ボーフォート枢機卿との一触即発状態は，回避された。だがこの労は，彼らの権力闘争を根本的に解させたものではなく，依然と危機状態は，続いたままであった。

そこでイングランド諮問会議は，このイングランド内の市民戦争を避けるために，フランスに出陣中であったイングランドNo. 1の権威者ベッドフォード公ジョンを帰国させた[20]。

ベッドフォード公ジョンは，フランスでの軍事計画をすべて取り止め，1425年12月20日妻とともに帰国した。

帰国したベッドフォード公ジョンは，まずはじめに「現在のグロースター

17) Oman, C., *op. cit.*, p. 288.
18) Oman, C., *op. cit.*, p. 297.
19) Jacob, E. F., *op. cit.*, p. 229.
20) Oman, C., *op. cit.*, p. 297.

公は，もはや摂政でも主要な大法官でもない[21]」というように感じた。要するに彼は，弟グロースター公ハンフリーではもはやこの権力闘争を解決させることができなく，イングランドを統制させることが不可能である，と悟った。また彼は，ロンドン市民からかなりの敵愾心を持たれているウィンチェスター司教ヘンリー・ボーフォート枢機卿の力を弱めなければならない，と考えた[22]。

そこでベッドフォード公ジョンは，弟グロースター公ハンフリーとウィンチェスター司教ヘンリー・ボーフォートとを和解させるために，諮問会議を開催させた。すなわち1426年1月29日ロンドン郊外北北西のセント・オルバンス（St. Albans）で開催された諮問会議は，調停のため，2月13日にノーザンプトン（Northampton）で，両者会談を行うことを勧告した[23]。

ランカスター王家直系のグロースター公ハンフリーは，ランカスター王家傍系のウィンチェスター司教ヘンリー・ボーフォート枢機卿とのこの会談を拒否した。だが彼は，兄ベッドフォード公ジョンの特使に説得され，ライセスター議会（Leicester Parliament）に出席することにした。そして彼は，1426年3月7日に9人の上院議員から構成されたライセスター議会の中の委員会に対して，和解の意志を伝えた[24]。そして両者は，無事3月12日に和解した[25]。

その和解案の内容は，2日後の3月14日に，ウィンチェスター司教ヘンリー・ボーフォート枢機卿が大法官の職を辞するほど，グロースター公ハンフリーにかなり有利なように作成されていた[26]。ウィンチェスター司教ヘンリー・ボーフォート枢機卿が大法官の職を辞した後，今度は，彼と同様に権力志向の強いヨークの大司教ジョン・ケムプ（John Kemp, Archbishop of

---

21) Jacob, E. F., *op. cit.*, p. 229.
22) *cf.* Hallam, E., *op. cit.*, p. 166.
23) Jacob., E. F., *op. cit.*, p. 230.
24) *Ibid.*, p. 230.
25) Oman, C., *op. cit.*, p.299.
26) *Ibid.*, p. 299.

York）が台頭してきた[27]。

ベッドフォード公ジョンの和解努力によって，ランカスター王家直系のグロースター公ハンフリーと，ランカスター王家傍系のウィンチェスター司教ヘンリー・ボーフォート枢機卿との一触即発状態は，回避された。この対立関係を表にすると表1．ランカスター王家内の内紛となる。

表1． ランカスター王家内の内紛

グロースター公ハンフリー（直系）	vs.	ウィンチェスター司教ヘンリー・ボーフォート枢機卿（傍系）

だがこの和解は，真の和解ではなく，紛争の火種を抱えたままの和解であった[28]。この火種が後の薔薇戦争へとなった。すなわち，ランカスター王家の内紛は，薔薇戦争への下地を形成させていったということができる。

Ⅲ．オルレアンの攻囲

不満だらけの和解案にサインをしたウィンチェスター司教ヘンリー・ボーフォート枢機卿は，1426年3月14日，断腸の思いで大法官の職を辞した。そしてこの大法官の職に，今度は，ヨークの大司教ジョン・ケムプが就いた[29]。このことは，ランカスター王家直系のグロースター公ハンフリーがランカスター王家傍系のボーフォート家を切り捨てて，ヨーク王家と手を結びたいということの現れであった。

グロースター公ハンフリーがヨーク王家と手を結ぶということは，今まで続いていたランカスター王家内の抗争から，しだいにランカスター王家 vs. ヨーク王家という構図へと移ることを意味する。この構図が本格的になってきたのは，グロースター公ハンフリーが3代目ヨーク公リチャード・プランタ

27）Jacob, E. F., *op. cit.*, p. 232.
28）Oman, C., *op. cit.*, p. 299.
29）*Ibid.*, p. 300.

ジネットを援軍に引き入れてからのことである。

イングランド国内の危機的状態を回避させるために急拠フランスから帰国したベッドフォード公ジョンは，一応，収拾のめどが付いたため，再びフランスに出陣した[30]。そして彼は，イングランド領地の後退が見られたため，再び1428年にオルレアンを攻撃した。

このオルレアンは，ロアル川の北岸にある軍事上重要な都市である。というのは，このオルレアンがフランス軍の掌中にある限り，そこからフランス軍が容易に侵攻してくるからである。この侵攻による脅威を取り除くためにベッドフォード公ジョンは，1425年から続いていた攻撃を再開させた[31]。なお実際に，イングランドに忠誠を誓い，そして指揮をとっていたのは，ソールズベリー伯ジョン・モンターギュ（John Montagu, Earl of Salisbury）であった[32]。

ここで1つ注意しなければならないことがある。それは，フランスのオルレアンを攻撃したイングランド軍のことである。というのは，このイングランド軍は，カンパニー（Company）と呼ばれる「傭兵団」であり[33]，今後のランカスター王家 vs. ヨーク王家との抗争に大きくかかわっていたからである。もともとこのカンパニーは，エドワード3世によって組織された軍隊であった。

エドワード3世は，即位当初から非常に複雑な問題を抱え込むことになった。それは，スコットランドとの領土問題と，その後生じたフランスとの王位継承問題とである[34]。

30）*Ibid.*, p. 300.
31）*Ibid.*, p. 300.
32）Hallam, E., *op. cit.*, p. 168.
33）Myers, A. R. ed., *English Historical Documents*, Vol. Ⅳ, 1327-1485, Eyre & Spottiswoode, 1969, p. 61.〔Chronicon de Lanercost, S. H. R., Vol. 9, 408〕.
34）エドワード3世は，1327年わずか15歳でイングランド王に即いた。イングランド王といっても，実際に権力を握っていたのは，スコットランド問題に介入し，しかも私的な利益のみを考えていたエドワード3世の母イザベル（Isabella

（次頁脚注へ続く）

イングランドとスコットランドとの領土問題において，依然としてスコットランドに加勢していたのは，フランスであった。そしてそのフランスに対してエドワード3世は，母イザベルが最後の正統なフランス王シャルル4世（Charles Ⅳ, le Bel, 1322-1328）の妹であることを盾に取り，フランスの王位継承権を主張した[35]。そこでこのフランスとイングランドとの間に戦争が生じた。

フランスでの王位継承権問題，すなわち対フランス戦争に対してイングランド議会は，多額な戦費を用意した。というのは，エドワード3世がイングランドとフランスとの王になれば，フランスへ輸出している商品の関税がヨリ少なくてすみ，また貿易も拡大されるからである。

このイングランド議会による多額な戦費の支出によって，エドワード3世は軍隊を強化させることができた。すなわちこの時点で，有給でしかも海外で戦争することを目的とした職業軍人「傭兵団」，カンパニーが出現したのである。

カンパニーが出現するまでの軍事力は，封建的軍隊召集授権書（Commissioners of Array）によって徴集された民兵の集まりであった。この軍隊召集授権書によって，イングランド王は多数の民兵を容易に集めることができた[36]。だが，これらの民兵は，封建的な徴兵制度によって集められた兵士であり，彼らにはあまり戦闘意欲がなかった。そこで対フランス戦争が激化す

---

of France, 1292-1358）と母の愛人マーチ伯ロジャー・ドゥ・モーティマー（Roger de Mortimer, 1st Earl of March, 1330年処刑）とであった。実際エドワード3世が実権を握ったのは，モーティマーを処刑し，そして母イザベルをノーフォークのライジング城（Castle of Rising）に幽閉した1330年であった。Tout, T. F., The History of England : from the Accession of Henry Ⅲ. to the Death of Edward Ⅲ. 1216-1377, in William Hunt and Reginald L. Poole, eds., *The Political History of England*, Vol. 3, Repr. of 1905, ed., Ams Press, Kraus Reprint C., 1969, p. 269.

35) Jacob, E. F., *op. cit.*, p. 137.

36) Powicke, M., The Thirteenth Century 1216-1307, in Sir George Clark, ed., *The Oxford History of England*, Vol. 4, Repr. of 1962, ed., Second edition, Oxford University Press, 1992, p. 554.

るにつれて，この軍隊召集授権書は，廃止された。

そこでエドワード3世は，戦闘意欲があり，しかも海外で戦うことを目的とした有能な職業軍人を望んだ。その有能な職業軍人を彼は，給料を支払うことによって実現させた。すなわち私的な「傭兵団」，カンパニーが出現したのである。

このカンパニーの雇用は，王ではなくて，実際に給料を支払っている封建貴族であった[37]。

では，カンパニーと王との関係は，どうであったのか。海外戦争に突入した場合，王はカンパニーに小額の給料を支払うという条件で，封建貴族と契約を結び，そしてこのカンパニーを出兵させるという関係であった。

封建貴族は，民兵の中から有能な者を有給で雇うことによって，「傭兵団」すなわち私的なカンパニーを組織させていった。そして封建貴族は，王の有事の際，このカンパニーに出兵命令を下した。

このカンパニーは，対フランス戦争での中心的な戦闘員になっていった。

フランスに出陣中のソールズベリー伯ジョン・モンターギュのまず第1の仕事は，敵陣の砦を弱体化させることにあった。そのためには彼は，オルレアンの砦を偵察しなければならなかった。だが彼は，その前に致命的な傷を負い，そして7日後にメーウング（Meung）で亡くなってしまった[38]。その後，彼とは異なった手腕を持つ4代目サフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポール（William de la Pole, 4th Earl of Suffolk, 1386-1450）が彼の軍隊を引き継いだ[39]。

4代目サフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポールは，ソールズベリー伯ジョン・モンターギュみたいにオルレアンの敵陣を包囲し，相手方に積極的

---

37) Tout, T. F., The History of England : from the Accession of Henry Ⅲ. to the Death of Edward Ⅲ. 1216-1377, in William Hunt and Reginald L. Poole, eds., *The Political History of England*, Vol. 3, Repr. of 1905, ed., Ams Press, Kraus Reprint C., 1969, p. 409.
38) Jacob, E. F., *op. cit.*, p. 245.
39) *Ibid.*, p. 245.

にプレッシャーを与えていたのではなくて，軍隊を隣の町にある冬期用営舎まで後退させ，占領した砦の中に駐屯地を置き，そしてそこから消極的にプレッシャーを与えていたのであった[40]。要するにイングランド軍は，オルレアンの敵陣をただ単に包囲し，敵に脅威を与えているだけであり，敵陣内まで侵入することができなかったのである。

この時点で，ソールズベリー伯ジョン・モンターギュ自身の意志とは逆に，対フランス政策は後退してしまった。

この後退の背景には，ベッドフォード公ジョンが全力投球で，対フランス戦争に対処できなかったからである。というのは，対フランス戦争に対して，グロースター公ハンフリーが積極的な攻撃姿勢を見せていたのに対して，ウィンチェスター司教ヘンリー・ボーフォート枢機卿が消極的な和平姿勢を見せていたからである。要するにイングランド国内での No. 2 の地位にあるグロースター公ハンフリーと，No. 3 の地位にあるウィンチェスター司教ヘンリー・ボーフォート枢機卿とのコンセンサスが取れていなく，イングランド国民が一致団結して，対フランス戦争に当たれなかったのである。

また対フランス戦争での後退について，具体的な例を見てみる。サー・ジョン・ファストルフ（Sir John Fastolf）は，パリから4代目サフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポール軍隊に食糧を補給している荷馬車の護衛に，小部隊でもってあたっていた。その小部隊が，1429年2月12日から2日間，ロウブライ（Rouvray）で，フランス王シャルル7世（Charles Ⅶ, le Victorieux, 1422-1461）の下臣であり，しかもスコットランド人を率いていたクレアモンド伯（Count of Clermont），アルブレト卿（Lord of Albret），サー・ジョン・スチュワート（Sir John Stewart）たちによって襲われた。なお，この戦いは，“ヘリングスの戦い”と呼ばれ[41]，かろうじてサー・ジ

40）*Ibid.*, p. 245.

41）この2日間続いた戦いを，一般に“ヘリングスの戦い（Battle of Herrings, ニシンの戦い）”という。というのは，サー・ジョン・ファストルフの荷馬車の中は，4代目サフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポール軍隊のための塩漬け魚が積まれていたからである。Oman, C., *op. cit.*, pp. 302-303.

ョン・ファストルフの方が勝った。

そして，サー・ジョン・ファストルフ小部隊は，4代目サフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポール軍隊に，無事，食糧を届けることができた。食糧を届けられた4代目サフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポール軍隊の対フランス攻撃は，何ら変わりなく，フランスの敵隊を遠くから攻囲しているだけのことであった[42]。この“ヘリングスの戦い”の結果，イングランド軍は，オルレアン北西部のパティ（Patay）を，手放さざるを得なくなった[43]。

だが，もしここでベッドフォード公ジョンのもとイングランド議会が，一致団結して対フランス戦争に当たっていたならば，サー・ジョン・ファストルフ小部隊は，2日間フランス軍から危険な目に遭わなくて済んだであろうし，また包囲攻撃も激しく行うことができ，そして容易にオルレアンを奪取することができたであろう。

イングランド軍，すなわちベッドフォード公ジョンがオルレアンを攻略できなかった第1の原因は，イングランド議会が全面的に協力してくれなかったこと，また第2の原因は，1429年に「オルレアンの少女」or「聖少女」といわれるジャンヌ・ダルクが出現したことである[44]。

ジャンヌ・ダルクは，自分をフランス王と国民とを助けるための神のメッセンジャー，と信じていた[45]。すなわち彼女は，神の意志として，イングランド人をフランスから追い出さなければならないと考え[46]，1429年5月3日オルレアンを，イングランド軍の攻囲から救った[47]。さらに彼女は，フランス軍人の戦闘能力や熱意を呼び起こさせることによって，イングランド軍の1/3ないしはそれ以上の兵士を殺害させ，そして1429年6月19日にオルレアン北部パティを奪回させた[48]。このパティ奪回によってシャルル7世

42) Oman, C., *op. cit.*, p. 303.
43) Jacob, E. F., *op. cit.*, p. 247.
44) Hallam, E., *op. cit.*, p. 170
45) Oman, C., *op. cit.*, pp. 305-306.
46) Jacob, E. F., *op. cit.*, p. 246.
47) Oman, C., *op. cit.*, p. 307.
48) *Ibid.*, pp. 308-309.

は，無事彼女の約束どおり7月7日ランス（Rheims）で，フランス王の戴冠式を済ませることができた[49]。

このランスという地は，フランスの歴代の王が戴冠式を行ったところである。この地をフランスが奪回したということは，ジャンヌ・ダルクによってフランス軍の方がイングランド軍よりも，ヨリ優勢に立ったということがわかる。またこのランスで，シャルル7世が戴冠式を行ったということは，もはやヘンリー6世は，ランスでフランス王としての伝統的な戴冠式ができなくなった，ということを意味している。要するにフランスは，神のメッセンジャーとしてのジャンヌ・ダルクの働きにより，フランスでの軍事的主導権をイングランドから奪取できたのである。

一方，イングランド摂政No. 1のベッドフォード公ジョンにとって，オルレアンの喪失は，非常にショックなことであった。またランスでのシャルル7世の戴冠は，彼にとってショック極まりないものであった。

ベッドフォード公ジョンは，ヘンリー6世が無事，イングランド王とフランス王とを継承するまで，摂政をイングランド議会から命じられた者であった。だが，シャルル7世がフランス王位を継承したことにより，彼の存在価値は，薄れてしまった。

これらのことに慌てたベッドフォード公ジョンは，1429年11月6日ヘンリー6世にイングランド王としての戴冠式を済ませ[50]，さらに彼は，1431年12月16日パリで，伯父のウィンチェスター司教ヘンリー・ボーフォート枢機卿によって，フランス王としての戴冠式を済ませた[51]。ヘンリー6世に身の危険を与えながらもベッドフォード公ジョンがフランス王位を戴冠させたということは，ベッドフォード公ジョン自身が，フランスでのイングランド領土を保持，あるいは拡大させたかったのに違いない。

だが事態は一変していた。オルレアンの喪失後，ベッドフォード公ジョン

---

49) *Ibid.*, p. 309.
50) *Ibid.*, p. 312.
51) *Ibid.*, p. 316.

がなすすべがないほど，フランスでのフランス軍の勢力は拡大しており，その勢力は，1430年5月30日ジャンヌ・ダルクを捕らえ，そして彼女を1431年5月29日に処刑したとしても[52]，もはや止めることができないほどであった。例えば，1431年12月16日にパリでフランス王の戴冠式を挙行した10日後，ヘンリー6世は，パリから追われるようにして逃げ，そして1432年2月にイングランドに戻った[53]，ことからもわかるであろう。

Ⅳ．ヘンリー6世の立場

フランスの王位継承問題について，イングランドとフランスとの緊張状態をヨリ一層悪化させたのは，1432年10月13日のベッドフォード公ジョンの妻アン（Ann）の死であった[54]。

ベッドフォード公ジョンは，フランスでの権力拡大のために，最初の妻アンと1423年6月に政略結婚した。このアンがブルゴーニュ公フィリップ・ル・ポン（Philip le Bon, Duke of Burgundy）の妹であったため，当然ベッドフォード公ジョンは，ブルゴーニュ公フィリップ・ル・ポンと親密関係になった[55]。

だがアンの死によって，この親密関係は絶たれた。この親密関係をヨリ一層悪くさせたのは，ベッドフォード公ジョンが，1433年6月23日に2番目の妻ルクサンプールのジャケッタ（Jacguette of Luxemburg）と結婚したことによってであった。というのは，このジャケッタがブルゴーニュ公フィリップ・ル・ポンの下臣であり，しかも当時敵対関係にあったセント・ポル伯（Count of St. Pol）の娘であったからである[56]。

ベッドフォード公ジョンが最初の妻アンと結婚したのは，フランスでの権

52）*Ibid.*, p. 314 and p. 316.
53）*Ibid.*, p. 317.
54）*Ibid.*, p. 318.
55）*Ibid.*, pp. 290-291.
56）Hallam, E., *op. cit.*, p. 178.

力拡大のためであって，それ以外の何物でもなかった。アンの死によってベッドフォード公ジョンは，自分の野望を貫き通すために，今度はブルゴーニュ公フィリップ・ル・ポンの意志を全く無視して，彼とは敵対関係にあったフランスの貴族セント・ポル伯の娘ジャケッタと結婚した。この結婚も，ベッドフォード公ジョンの意志を貫き通すための政略結婚であった。

ブルゴーニュ公フィリップ・ル・ポンにとって，ベッドフォード公ジョンの行動は，全く話にならないことであった。このことが原因で，両者の間に抗争が始まった。またブルゴーニュ公フィリップ・ル・ポンは，グロースター公ハンフリーとも敵対関係であったので，非常に苦境に立たされてしまった[57]。

そこでブルゴーニュ公フィリップ・ル・ポンは，シャルル7世と公然と和平交渉に入った。いわゆる1435年アラスで開催されたイングランド・フランス和平のためのアラス会議（Conference of Arras）である。このアラス会議でブルゴーニュ公フィリップ・ル・ポンは，イングランドとの旧同盟を破棄し，シャルル7世とアラスの条約を締結した[58]。

一方，イングランドは，このアラス会議で提出された和平条約を1435年7月6日拒否した[59]。というのは，このアラス会議の和平条約とは，ヘンリー6世がフランス王位を放棄すること，フランスでのイングランド領すべてをフランスに返還すること，またその返還の代わりに領有することを許された土地は，シャルル7世への封建的臣従の礼，忠誠の義務を果たさなければならないこと，ということであったからである[60]。このような一方的なフランス側の和平条約を突き付けられたということは，対フランス戦争において，イングランド軍が相次いで敗けていたことが良くわかる。

このアラス会議での和平条約拒否後，イングランドは，同盟を結んでいた

57）Oman, C., *op. cit.*, p. 292.
58）Neillands, R., *The Hundred Years War*, Repr. of 1990, ed., Routledge, 1993, p. 270.
59）Oman, C., *op. cit.*, p. 322.
60）Jacob, E. F., *op. cit.*, p. 262.

ブルゴーニュ公フィリップ・ル・ポンを完全に失い，対フランス戦争での軍事力に大打撃を受けた。またさらに，イングランドの軍事力に大打撃を与えたのは，3年後の1435年9月15日未明，ルーエン（Rouen）でのベッドフォード公ジョンの死であった[61]。

対フランス戦争およびイングランド国内での守護神であったベッドフォード公ジョンの病死は，イングランド国内での指揮命令系統が断たれたということを意味した。またこのことは，再びランカスター王家内での権力闘争が勃発するということも意味した。

イングランド議会は，ベッドフォード公ジョンの後任として，1436年2月，24歳の若い故ケンブリッジ伯の子3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットをフランスに赴任させた[62]。このヨーク公リチャード・プランタジネットのフランスへの出陣によって，イングランドは辛うじて対フランス戦争を，継続させることができた。この時の対フランスというのは，シャルル7世と，新しい敵ブルゴーニュ公フィリップ・ル・ポンのことである[63]。1436年からフランスでの軍事力を強化したにもかかわらず[64]，この時点でイングランドは，征服地を徐々にフランスに奪われていった。

ベッドフォード公ジョンの病死後も，イングランド国内においては依然として，グロースター公ハンフリーとウィンチェスター司教ヘンリー・ボーフォート枢機卿との抗争は，続いていた。

このランカスター王家内の抗争に異変が生じた。それは，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットが，グロースター公ハンフリーのパルチザンとして荷担したからである[65]。

このことによりランカスター王家内の内紛は，イングランドの実力貴族たちを巻き込んだすさまじい抗争へと発展していった。いいかえると，イング

61) Oman, C., *op. cit.*, p. 323.
62) Jacob, E. F., *op. cit.*, p. 465.
63) Oman, C., *op. cit.*, p. 325.
64) Curry, A., *The Hundred Years War*, Macmillan Press, 1993, p. 112.
65) Oman, C., *op. cit.*, p.328.

ランドの貴族たちは，対フランス戦争において，和平派と戦闘派とに分かれ，内戦を始めていった。その和平派のメンバーは，ウィンチェスター司教ヘンリー・ボーフォート枢機卿を中心に，サマセット公ヘンリー・ボーフォート（John Beaufort, 1st Duke of Somerset），モンターギュ伯エドモンド（Edmund, Count of Montagne），4代目サフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポール，ヨーク大司教ジョン・ケムプであった。これに反して戦闘派のメンバーは，グロースター公ハンフリーを中心に，故ケンブリッジ伯の子3代目ヨーク公リチャード・プランタジネット，ソールズベリー伯リチャード・ネヴィル（Richard Nevill, Earl of Salisbury）[66]であった。この内紛において，若いヘンリー6世は，和平派を支持した[67]。

以上の内紛を表にすると，表2．ランカスター王家内の内紛（和平派 vs. 戦闘派）となる。

表2． ランカスター王家内の内紛（和平派 vs. 戦闘派）

和　平　派	戦　闘　派
ウィンチェスター司教ヘンリー・ボーフォート枢機卿	グロースター公ハンフリー
サマセット公ジョン・ボーフォート	ヨーク公リチャード・プランタジネット
モンターギュ伯エドモンド	ソールズベリー伯リチャード・ネヴィル
サフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポール	
ヨーク大司教ジョン・ケムプ	

ここで1つ注意しなければならないことがある。それは，ランカスター王家内の内紛の中に，故ケンブリッジ伯の子3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットが加わっているということである。このことは，その後のランカスター王家 vs. ヨーク王家，すなわち薔薇戦争への下地を，この時点で作ってしまったといえるのである。

66）リチャード・ネヴィルは，1428年のオルレアン功囲で戦死したソールズベリー伯ジョン・モンターギュの娘と結婚することによりソールズベリー伯位を継承した。• Oman, C., *op. cit.*, p. 324. n. 1.

67）Hallam, E., *op. cit.*, p.188.

1435年9月15日に兄ベッドフォード公ジョンが病死したこと，また1437年に親政を迎えたヘンリー6世が和平派を支持したことによって，戦闘派の摂政グロースター公ハンフリーは，イングランド議会での権力を，ほとんど失ってしまった[68]。この権力を巻き返すためにグロースター公ハンフリーは，対フランス戦争による勝利だけを考えていた。

なおこの対フランス戦争の時期にグロースター公ハンフリーの片腕である3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットに長男が誕生した。すなわち，1442年4月28日にマーチ伯エドワード，後のエドワード4世（Edward IV, Earl of March, 1461-1470, 1471-1483）の誕生である。このマーチ伯エドワードは，父の軍事力に加わるとともに，将来，イングランドに反攻し，ランカスター王家軍を破り，ヨーク王家を継承していった。

一方，和平派においては，ヘンリー6世から絶大なる信用を得ている4代目サフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポールが中心となり，フランスとの和平実現に向けて努力していた[69]。

サフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポールが和平交渉で導いた結論は，次のとおりであった。すなわち，イングランド王家とフランス王家との婚姻による休戦協定である[70]。

実際に，イングランドがメーヌ（Maine）の主導権を放棄するという条件付きで，1445年4月22日ティッチフィールドの寺院（Abbey of Titchfield）で，23歳のヘンリー6世と，16歳のアーンジュ公ルネ（René）の娘マーガレット（Margaret of Anjou, 1430-1482）とが結婚式を挙げた[71]。

イングランドにとってこの結婚は，休戦が得られたものの，メーヌの主権を剥奪されたことにより，ストレスが溜まった結婚といわざるを得ないで

68）Oman, C., *op. cit.*, p. 332.
69）Jacob, E. F., *op. cit.*, p.472.
70）Oman, C., *op. cit.*, p. 334.
71）マーガレットがシャルル7世の姪であり，またアーンジュ公ルネの娘であったため，この結婚により，4代目サフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポールは，アーンジュ公ルネに，対イングランド戦で失ったメーヌを回復させることができた。• Jacob, E. F., *op. cit.*, pp. 478-479.

あろう。

ヘンリー6世と結婚したマーガレットは，自分の結婚に尽力してくれた[72]4代目サフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポールに信頼を置き，彼の側の1員として行動するようになった。いいかえると，サフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポール vs. グロースター公ハンフリーの確執において，マーガレットは，サフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポール側の立場で物事を考えるようになった。

このマーガレットは，「明朗，活発，強い意志を持った妻」[73]であるがゆえに，ヘンリー6世を説き伏せ，戦闘派のグロースター公ハンフリーとヨーク公リチャード・プランタジネットとに処分を下した。

処分の出たグロースター公ハンフリーは，1447年2月10日に「反逆罪」で逮捕された。そして監禁5日後の2月23日に，彼は脳卒中の発作で亡くなった[74]。だが，この死因について，いささか問題がある[75]。

和平派の中心人物であるウィンチェスター司教ヘンリー・ボーフォート枢機卿も，グロースター公ハンフリーの死後6週間で亡くなった。その後，和平派を彼の甥である サマセット伯エドマンド・ボーフォート，および4代目サフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポールが受け継いだ。

またマーガレットから処分が下された戦闘派の3代目ヨーク公リチャー

---

72) 1445年4月22日に，ヘンリー6世とマーガレットとの結婚が実際に挙行された。だがその前に，この結婚をヨリ早くヨリ確実に成功させるために4代目サフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポールが気を利かし，ヘンリー6世の代理として，マーガレットとフランスで仮の結婚式を挙げていた。というのは，ヘンリー6世が挙式当日まで，挙式場所に到着できなかったからである。• *cf.* Jacob, E. F., *op. cit.*, p. 476.

73) Oman, C., *op. cit.*, p. 337.

74) *Ibid.*, p. 338.

75) 当時の最良の年代記は，グロースター公ハンフリーの自然死について，多少の疑問を持ちながらも受け入れている。だが彼の自然死について反対する仮説の方が多い。4代目サフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポールの共謀者たちは，けっしてグロースター公ハンフリーを尋問裁判し，死に追いやろうとはしなかった。だが，グロースター公ハンフリーの死が尋問裁判によって否決される限りにおいては，別のことであった。• Oman, C., *op. cit.*, p. 338. n. 1.

ド・プランタジネットは，フランスでの総督を解任され，そして1447年7月アイルランド副総督（Lord-lieutenant of Ireland）に左遷された[76]。

これに対してマーガレットは，1448年春にサマセット公エドマンド・ボーフォートを，ノルマンディー総督に任命し，そして彼を同年6月に公爵に昇進，すなわち2代目サマセット公エドマンド・ボーフォート（Edmund Beaufort, 2nd Duke of Somerset）を誕生させた[77]。

なお，まだこの時点までは，王妃マーガレットは，和平派の2人のリーダーのうち，2代目サマセット公エドマンド・ボーフォートよりも，4代目サフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポールの方に，ヨリ信頼度を置いていた。すなわち，王妃マーガレットから支援されていた4代目サフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポールが，和平派において実権を握っていた。

一方，1447年のグロースター公ハンフリーの死後，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットは，自分が次期イングランド王に即位すると考え，戦闘派のリーダーになっていった。なおこの考えは，もうじき5歳になる彼の息子マーチ伯エドワードにも受け継がれていった。

戦闘派のグロースター公ハンフリー，および3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットの処分，さらに和平派の2代目サマセット公エドマンド・ボーフォートの伯爵から公爵への昇進，また彼への支援，これらすべてヘンリー6世の意思にかかわらず，王妃マーガレット自身が行ったことである。これらのことから判断できることは，ヘンリー6世には全く権力意識がなかったということである。

権力意識がなかったとしても，1国の君主である限り，その政治的手腕は問われるべきものである。その政治的手腕に関して，ヘンリー6世は，かなり欠けていた。

ヘンリー6世自身の全体の能力を否定するわけではないが，ヘンリー6世は，イングランド王たる器ではなかったといえるであろう。このことは，や

76）Oman, C., *op. cit.*, p. 340.
77）*Ibid.*, pp. 339-340.

がて台頭してくるマーチ伯エドワードによって，王位継承権を主張され，そして彼によって王位を剥奪された時，ヘンリー6世自身が終わりを告げるとともに，またランカスター王家そのものも幕を閉じることになってしまったことからもわかるであろう。

V．ヨーク公のクーデター

メーヌの失地をアーンジュ公ルネに回復させたことによって気をよくしたフランスは，いまだにイングランドの手にあるノルマンディーを徐々に攻略し始めた。すなわち1449年にフランス軍は，フランス北西のフージャー（Fougères）とノルマンディーに進攻し[78]，そしてフージャーを陥落させ，さらにノルマンディーを征圧し始めたのであった。

イングランドにとってこの危機的状態は，軍隊の統制不備から招いたものであった。というのは，イングランドの国政をも左右する2代目サマセット公エドマンド・ボーフォートと4代目サフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポールとの仲が悪くなり[79]，十分整備され統制のとれた軍隊をノルマンディーに，投入できなかったからである。

オルレアンの攻囲失敗後，イングランドは，全く対フランス戦争に勝てなくなって，ノルマンディーをも徐々に，フランス軍に征圧され始めてきた。

これらのことに対して，イングランド国民は怒り，そして4代目サフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポールの政治責任を糾弾した。

イングランド国民の怒りは，彼の友人であるチチェスター司教アダム・モーレンス（Adam Moleyns, bp. of Chichester）を1450年1月9日に[80]，またソールズベリー司教ウィリアム・エイスコッフ（William Ayscough, bp. of Salisbury）を同年1月29日に殺害する[81]という形で現れた。

78）*Ibid.*, p. 341.
79）*Ibid.*, p. 340.
80）*Ibid.*, p. 343.
81）Jacob, E. F., *op. cit.*, p. 495.

当の4代目サフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポールは，イングランド議会から裁判にかけられた。裁判の結果が出る前に彼は，ヘンリー6世に助けを求め[82]，そして1450年3月17日にヘンリー6世から，1450年5月1日から5年間の間，国外追放の処分を受けた。

この処分は，誰がみても納得のできるものではなかった。その結果，ロンドンとケント（Kent）で一揆が起こった[83]。身の危険を感じた4代目サフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポールは，4月30日にイプスウィッチ（Ipswich）から出航した。だが，彼の船は，彼の出航を4月27日から待ち伏せしていた船舶によって捕らえられ[84]，結局彼は，5月2日に殺害されてしまった。

4代目サフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポールの殺害によって，和平派のリーダーは，2代目サマセット公エドマンド・ボーフォートになった。

1450年3月17日のヘンリー6世の処分内容に不満を持ったケントの一揆は，その後，国政全般に不満を持つジョン・ケイド（John Cade）をリーダーとして，拡大していった。この拡大した一揆は，1450年5月31日の“ジャック・ケイドの反乱（Jack Cade's Rebellion)”になった。つまり，この“ジャック・ケイドの反乱”とは，著しく退廃した強奪的な政府に対する暴動である[85]。

ジョン・ケイドをリーダーとする反乱軍は，イングランド議会を掌握するためロンドンに進撃した。だが，その前に反乱軍は，反乱軍の集合場所であるブラックヒース（Black heath）で，王党軍（Royal Host）と戦わなけれ

82）Seward, D., *The Hundred Years War*, the English in France 1337-1453, Repr. of 1978, ed., New York : Atheneum, 1982, p. 255.

83）Oman, C., *op. cit.*, p.346.

84）Hallam, E., *op. cit.*, p.204.

85）1450年5月31日のジャック・ケイドの反乱は，1450年3月17日，4代目サフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポールの失態に対して，ヘンリー6世が処分した。その処分内容に不満を持ったケント人が起こした一揆に起因する。またその一揆のリーダーにジョン・ケイドがなり，イングランド政府の悪政改革をうたうことによって，ヨリ多くの群衆を引き込み，ジャック・ケイドの反乱へと導いていった。

ばならなかった。というのは，ヘンリー6世がロンドンに向かっているジャック・ケイドの反乱軍を阻止させるために，王党軍をブラックヒースに集結させていたからである[86]。

戦いの結果は，悪政改革のため立ち上がったケントの人びとを中心とする反乱軍の勝利であった。このケントの人びとの具体的な要求は，アイルランドから，故ケンブリッジ伯の子3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットを呼び戻し，悪政の元凶となった2代目サマセット公エドマンド・ボーフォートとその支持者たちを，イングランド議会から追放することであった。これらのことは，反乱軍のリーダー，すなわちジョン・ケイドが3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットに，イングランド王位を継承させたかったにほかならない[87]。

王党軍の敗北により，ジャック・ケイドの反乱軍は，ロンドン近くまでやって来た。ロンドンに居たヘンリー6世は，身の危険を感じ，反乱軍の要求を受け入れた。そして彼は，王党軍を解散させるとともに，自らケニルワース（Kenilworth）に逃げた[88]。

ジャック・ケイドの反乱軍は，1450年7月2日サウスワーク（Southwark）を掌握し，ロンドン市長に，ロンドン・ブリッジの市門をオープンするように要求した。これに対してロンドン市長カルトン（Charlton）は，きっぱりと断った。そしてロンドン市長カルトンは，反乱軍の無法に対して，ロンドン・タワーの要塞を強化するために，市門を閉ざし，ロンドン・ブリッジを防備した。

ジャック・ケイドの反乱軍とロンドンの市民軍との激しい抗争の末，ウィンチェスター司教ワインフリィート（Bishop Wainfleet of Winchester）とともに，カンタベリー大司教とヨーク大司教とが調停役に入った。調停の内容は，もし反乱軍が解散するならば，反乱軍に対して恩赦を与えるというも

86) Oman, C., *op. cit.*, p. 348.
87) *cf.* Jacob, E. F., *op. cit.*, p. 499.
88) Oman, C., *op. cit.*, p. 348.

のであった[89]。調停の結果，反乱軍は解散し，そして反乱兵は恩赦によって自由になった。

だが，ジャック・ケイドの反乱軍のリーダー，すなわちジョン・ケイドには恩赦が出なかった。というのは，恩赦の名簿の中にジョン・ケイドという名が記載されていなかったからである[90]。その結果，ジョン・ケイドは，1450年7月12日逮捕され，殺害された。このことにより，一応，王党軍と反乱軍との抗争は，終結した。

この抗争の間，イングランドは，対フランス戦争，すなわち1450年4月15日から始まったフォルミニーの戦い（Battle of Formigny）により，8月にノルマンディーを失ってしまった[91]。

友人4代目サフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポールの死，そしてこのノルマンディーの喪失により，2代目サマセット公エドマンド・ボーフォートは，イングランドに戻らず，カレーに行った。

悪政を改革しようとするイングランド国民は，自然と，1450年9月8日アイルランドからウェールズにやって来た3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットの支持者へとなっていった[92]。いいかえると，イングランド国民は，善政を求めるために，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットの支持者になっていったのである。

これに対してイングランド政府は，1450年9月11日に，2代目サマセット公エドマンド・ボーフォートをイングランド武官長（Constable of England）に任命するために，フランスのカレーから呼び戻した[93]。彼の急な召還は，イングランド国内が急迫していたことにほかならない。また彼の急な召還により，カレーの政府は，非常に不安定になった[94]。

89）*Ibid.*, p. 349.
90）*Ibid.*, pp. 349-350.
91）*Ibid.*, p. 344.
92）Hallam, E., *op. cit.*, p. 205.
93）Oman, C., *op. cit.*, p. 350.
94）このカレーの政府をヨリ不安定にさせたのは，シャルル7世である。という

（次頁脚注へ続く）

アイルランドからウェールズへ，そして1450年9月29日イングランドに帰国したヨーク公リチャード・プランタジネットは，50,000人の群衆とともにロンドンに入城した。そして彼は，ヘンリー6世に対して，イングランド議会への復権と，ノルマンディー喪失による2代目サマセット公エドマンド・ボーフォートの政治責任を要求した[95]。

またその後，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットは，自分の配下をバックにし，イングランドの王位継承権を，ヘンリー6世に要求した[96]。この要求により，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットと，ヘンリー6世に多大な影響を与えている2代目サマセット公エドマンド・ボーフォートとの本格的な抗争が始まった[97]。

この抗争こそが後の薔薇戦争への主要因となったのである[98]。

ところで，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットがイングランドの王位継承権を強く要求できたのは，彼の母アン（Anne Mortimer）が王位継承権を持つ，マーチ伯ロジャー・モーティマー（Roger Mortimer, Earl of March）の女子相続人であり，また彼自身，父系によるエドワード3世の四男の家系，母系による同じくエドワード3世の二男の家系であったからである[99]。このことは当然，エドワード3世の三男の家系を継ぐヘンリー6世よりも，ヨリ継承順位において優先していた。

そこで3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットは，1452年2月，この法的相続人という権利を盾に取り，ダートフォード（Dartford）でクーデターを試みた。だが，このクーデターは，失敗に終わった。3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットは，2代目サマセット公エドマンド・ボー

のは，シャルル7世がギエンヌ（Guienne）にヨリ注意を払い始めたからである。• *cf.* Seward, D., *op. cit.*, p. 256.

95) Oman, C., *op. cit.*, p. 351.

96) *Ibid.*, p. 352.

97) *cf.* Cannon, J. and Griffiths, R., *op. cit.*, p. 267.

98) Oman, C., *op. cit.*, p. 352.

99) Ross, C., *The Wars of the Roses*, Repr. of 1976, ed., Thames and Hudson, 1994, Table II : The Houses of York and Nevill（巻末）.

フォートに捕らえられ，断首される予定であった。だがヘンリー6世は，このことを拒否し，2人の和解を強制した[100]。

3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットが執拗に2代目サマセット公エドマンド・ボーフォートの失脚を狙った背景には，2つの理由がある。その1つは，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットが1447年に，2代目サマセット公エドマンド・ボーフォートにフランス総督の職を奪われたことである。その2つ目は，政局の実権を握っている王妃マーガレットと，2代目サマセット公エドマンド・ボーフォートとが親密関係にあったからである。そこでこれら2つの理由により，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットがアイルランドから帰国した直後に，彼が王位継承権，議会復帰，さらに2代目サマセット公エドマンド・ボーフォートの議会追放，を要求したことは良くわかる。

一方，対フランス戦争は，1450年8月のノルマンディー喪失後，イングランドの立場はますます悪くなった。すなわちイングランドは，ギエンヌ（Guienne）をフランスから攻撃されるとともに，ボルドー（Bordeaux）を奪われてしまった。

これに対してイングランド政府は，シルースベリー伯ジョン・タルボット（John Talbot, 1st Earl of Shrewsbury）を大将とする遠征軍を1452年7月に組織し，そしてギエンヌに向かわせた。シルースベリー伯ジョン・タルボットは，1,600～1,800人の歩兵および弓兵からなる大規模なカンパニーを引き連れていたにもかかわらず[101]，シャスティヨンでの戦い（Battle at Castillon）で，フランス軍の砲弾に当たり，1453年7月17日に戦死した[102]。彼の死によって，シャスティヨンでの戦いは大敗に終わってしまった[103]。

100）Oman, C., *op. cit.*, p. 358.

101）Myers, A. R., ed., *English Historical Documents*, Vol. Ⅳ, 1327-1485, *op. cit.*, p. 270.

102）Allmand, C., *The Hundred Years War* : England and France at War c. 1300-c. 1450, Cambridge University Press, 1988, p.36.

103）この敗戦の15日前の7月2日に，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネ

（次頁脚注へ続く）

この1453年7月のシャスティヨンでの大敗により，完全にガスコニュー，およびギエンヌを喪失してしまったので，フランスでのイングランド領地は，エドワード3世以来所有してきたカレー地のみになってしまった[104]。

貴族から有給で雇われていた多数のカンパニーは，このシャスティヨンの敗戦後，イングランド本国に撤退しなければならなくなった。

イングランド本国に帰国したカンパニーは，イングランド社会に，マイナスの要因をもたらすようになった。というのは，封建的軍隊ではないこのカンパニーと，封建貴族との関係が薄らいできたからである。

以前は，封主（君主）と封臣（家臣）との関係は，土地を媒介にヨリ安定した関係を保っていた。いいかえると，封主は封臣に対して封（恩貸地）を与え，封臣は封主に対して勤労奉仕を行うことによって，封建的なヨリ密接した関係を保っていた。

だが今度は，封建貴族とカンパニーとの関係は，ただ単に金銭だけが，両者を結び付ける関係となってしまった。いいかえると，給料が支払われている場合は，カンパニーは封建貴族に対して勤労奉仕を行う義務があるが，そうでない場合は，カンパニーは勤労奉仕を行う義務がなくなった。このことは，カンパニーと封建貴族との関係が，ドライになってきたことを意味する。

このドライなカンパニーが，対フランス戦争の中心的戦闘員であり，そしてそのカンパニーが大量にイングランド本国に送り返された時，2代目サマセット公エドマンド・ボーフォート政府は，なにがしかの対応に迫られた。というのは，封建貴族がヨリ強い権力を持ち始めたからである。

イングランド国内で，カンパニーを多く雇えば雇うほど，権力が増すのは当然のことである。

そこで封建貴族は，カンパニーのうちの1リテイナー（Retainer, 有能

ットと，2代目サマセット公エドマンド・ボーフォートとが和解しておれば，2代目サマセット公エドマンド・ボーフォート政府の絶望的事態は，避けられたであろう。• *cf.* Oman, C., *op. cit.*, p. 360.

104) Hallam, E., *op. cit.*, p. 210.

な職業軍人）を，有給でヨリ多く雇用することによってリテイナーズ（Retainers）と称する小軍隊を組織させていった。

リテイナーズは，戦争が勃発した場合，封建貴族とともに戦い，封建貴族によって生活の一切を扶養してもらっていた小軍隊であった[105]。このリテイナーズの存在自体が貴族同志の争い，すなわち薔薇戦争への一翼をなしていた。

イングランドの一般国民は，このリテイナーズの存在を非常に嫌った。2代目サマセット公エドマンド・ボーフォート政府は，治安維持のためこの制度を禁止した。だが，封建貴族がこのリテイナーズによって，ヨリ大きな権力を手に入れることができたので，駄目であった。

そこで，このリテイナーズをヨリ多く雇用している3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットが，しだいにヨリ大きな権力を持ち始め，2代目サマセット公エドマンド・ボーフォートの軍事力と匹敵するようになった。このことによって，イングランド議会は，1453年，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットの議会復帰と王位継承権とを承認せざるを得なくなっていた。

ヘンリー6世は，カレー地以外の喪失にショックを受け，1453年8月突然，精神障害をきたしてしまった。これはおそらく，ヘンリー6世が，祖父シャルル6世（Charles VI, le Bien-Aimé, 1380-1422）の血を受け継いだことに因る[106]。

精神障害をきたしたヘンリー6世に対して，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットは，イングランド議会に対して摂政を要求した。だが，1453年10月王妃マーガレットがエドワード（Edward, Prince of Wales）を出産したため，彼の摂政要求は棚上げになった。その代わりにイングランド議会は，王子エドワードが成年に達するまで，あるいはヘンリー6世の病

105) McKISACK, M., The Fourteenth Century 1307-1399, in Sir George Clark, ed., *The Oxford History of England*, Vol. 5, Repr. of 1963, ed., Oxford University Press, 1992, p. 262.

106) Oman, C., *op. cit.*, p. 361.

気が回復するまでという条件付きで，1454年2月，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットを保護卿に指名した[107]。すなわち，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットの第1次摂政である[108]。いいかえると，1454年2月イングランド議会は，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットの王位継承権を認めなかったということである。

保護卿になった3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットは，まず最初に，自分の地位を確保するために，法的な兄弟であるソールズベリー伯リチャード・ネヴィルを大法官に任命し，そして2代目サマセット公エドマンド・ボーフォートを逮捕し，ロンドン・タワーに投獄した[109]。

だが突如として，1454年12月25日に，ヘンリー6世の病気が回復した[110]。病気が回復したヘンリー6世は，王妃マーガレットの入れ知恵とともに，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットを解任し，そして再び，2代目サマセット公エドマンド・ボーフォートを登用した。

ヘンリー6世の病気が回復した時点で，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットが保護卿の職を辞し，そしてその後，摂政の職を望まなかったならば，薔薇戦争は起こっていなかったであろう。

解任に激怒した3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットは，ヘンリー6世と王妃マーガレットとを討つために，クーデターを起こした。

このクーデターが多数の封建貴族を巻き込んだヨーク王家 vs. ランカスター王家の争い，いわゆる薔薇戦争である。

3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットを擁するヨーク王家は，白い薔薇のバッチを付け，彼の権勢を回復・拡大させるために，ソールズベリー伯リチャード・ネヴィル（Richard Nevill, Earl of Warwick, 1428-1471）と，その息子ウォリック伯リチャード・ネヴィル（Richard Nevill, Earl of Warwick, 1428-1471）とが中心となって戦った。

107) *Ibid.*, p. 363.
108) Jacob, E. F., *op. cit.*, p. 512.
109) Oman, C., *op. cit.*, p. 363.
110) *Ibid.*, p. 364.

これに対して，2代目サマセット公エドマンド・ボーフォートを擁するランカスター王家は，赤い薔薇のバッチを付け，彼の権勢を保持・強化させるために，ノーサンバランド伯ヘンリー（Henry, Earl of Northumberland）と，クリフォード卿ジョン（John, Lord Clifford）とが中心となって戦った。

この薔薇戦争を表にすると，表3．ヨーク王家 vs. ランカスター王家となる。

表3．ヨーク王家 vs. ランカスター王家

ヨーク王家（白薔薇）	ランカスター王家（赤薔薇）
ヨーク公リチャード・プランタジネット	サマセット公エドマンド・ボーフォート
ソールズベリー伯リチャード・ネヴィル	ノーサンバランド伯ヘンリー
ウォリック伯リチャード・ネヴィル	クリフォード卿ジョン

薔薇戦争の最初の戦いは，1455年5月22日，ロンドン郊外北北西のセント・オルバンズ（St.Albans）で始まった。この1455年のセント・オルバンズの戦いは，ネヴィル一族の軍事力を有したヨーク王家が3,000人，王党軍を有したランカスター王家が2,000人の歩兵軍事力であった[111]。

ここで1つ注意しなければならないことがある。それは，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットが王，王妃，サマセット公に対するただ単なる感情の縺れから，封建貴族を巻き込むクーデターを起こしたのだろうかということである。

たしかに3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットは，ヘンリー6世から，1447年7月フランス総督を解任され，アイルランド副総督に左遷された経緯がある。だが，ヘンリー6世が精神異常をきたした1453年8月から1454年12月25日までは，事実上，彼はイングランドの最高権力者であった。もしこの期間中に，彼が多数のリテイナーズを擁する大貴族を1人でもヨリ多く傘下に置いておれば，クーデターを起こさなくてもすんだであろう。だが現実には，1453年10月王妃マーガレットがエドワードを出産し，しかも

111）Hallam, E., *op. cit.*, p. 217.

1454年12月25日にヘンリー6世の病気が回復してからは，事態は急変した。

というのは，エドワード王子の出現により，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットは，もはや王位継承権を要求できなくなったからである。そこで彼は，法的に王位を得るのではなくて，武力によってしか王位を得ることができないと考えざるを得なくなっていた。この武力が，当時ヘンリー6世，王妃マーガレット，王子エドワード，2代目サマセット公エドマンド・ボーフォートが陣していたセント・オルバンズで現実なものになったのである。

この1455年3月22日のセント・オルバンズの戦いは，ヨーク王家の3,000人の歩兵が2,000人のランカスター王家の歩兵に功を奏して大勝した。これにより3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットは，2代目サマセット公エドマンド・ボーフォート，ノーサンバランド伯ヘンリー，クリフォード卿ジョンを殺害し，ヘンリー6世を捕えた[112]。

当時の封建戦争では，規模の戦争であり，規模の大きい方が勝った。というのは，リテイナーは，重装備した騎兵隊であり，追撃して敵を壊滅状態にさせるのが難しかったからである。

そしてまた，ヘンリー6世が精神病に陥ったので，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットが再び，保護卿に就いた。これを3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットの第2次摂政という[113]。

なお，1455年3月22日のセント・オルバンズの戦いは，1461年2月17日のセント・オルバンズの戦いと対比して，第1次セント・オルバンズの戦い（1st Battle of St. Albans）といい，また1461年の戦いを第2次セント・オルバンズの戦い（2nd Battle of St. Albans）という。

翌1456年に再び，ヘンリー6世の病気が回復した。このことにより，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットは，再度，政権を脅かされることとなった。その政権を脅かしている張本人は，王妃マーガレットであった。

---

112) Ross, C., *op. cit.*, p. 32.
113) *Ibid.*, p. 32.

政権に対する彼女の熱意は，すさまじいものがあった。このことは，彼女が1459年のブローア・ヒースでの戦い（Battle at Blore Heath）を準備していたこたからもわかる[114]。

その後，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットに対する敵意だけが増した王妃マーガレットは，王党軍主体のランカスター王家軍を立て直した。すなわち彼女は，ダッドリー卿（Lord Dudley）とオードリー卿（Lord Audley）とを，1459年7月22日ウェルズとの国境地帯ブローア・ヒースに派遣した。この1459年7月22日のブローア・ヒースでの戦いの結果，彼女はダッドリー卿とオードリー卿とを失ったものの，ヨーク王家軍を蹴散らすことができた[115]。

この敗北によって，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットは，アイルランドに逃げ，そしてソールズベリー伯リチャード・ネヴィルと，その息子ウィリック伯リチャード・ネヴィルとは，フランスのカレーに逃げ去った[116]。

1459年10月12日の3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットのラッドロウ（Ludlow）からの敗走後，イングランド議会は，ランカスター王家主体となっており，11月20日コヴェントリー（Coventry）会議を開催させることにした。すなわち，このコヴェントリー会議は，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットの権利を剥奪した会議であった[117]。

翌年の1460年にヨーク王家軍隊は，ソールズベリー伯リチャード・ネヴィルと，その息子のウォリック伯リチャード・ネヴィルとの合同軍隊と合体した。そしてヨーク王家軍隊は，ノーサンプトンで戦闘準備していたランカスター王家軍隊と7月10日に衝突し，勝利し，再びヘンリー6世を捕えた[118]。

---

114) Myers, A. R., ed., *English Historical Documents*, Vol. Ⅳ, 1327-1485, Eyre & Spottiswoods, 1969, pp. 281-282. (An English Chronicle, ed., J. S. Davies, 79-80 〔English〕)
115) Oman, C., *op. cit.*, p. 380.
116) Jacob, E. F., *op. cit.*, p. 516.
117) Myers, A. R., ed., *English Historical Documents*, Vol. Ⅳ, 1327-1485, *op. cit.*, p. 283. (Rot. Parl. v, 348 〔English〕)
118) Oman, C., *op. cit.*, p. 393.

この1460年7月10日のノーサンプトンの戦い（Battle of Northampton）での勝利の結果，コヴェントリー会議で権利剥奪を議決されていた3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットは，自ら9月8日，アイルランドからイングランドに赴き，ウェストミンスター議会を開催させることにした[119]。

捕虜になっていたヘンリー6世は，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットがウェストミンスター会議を開催させる2日前に，もうすでにウェストミンスター会議を開催させていた。そしてそのウェストミンスター会議で，ヘンリー6世は，コヴェントリー会議で議決されたすべての条項を無効，特に3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットの権利剥奪を無効にする法的手続きを行っていた[120]。

そして，1460年10月9日そのウェストミンスター会議で，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットは，「……私の王位継承を妨げるどんな権力も手段もない。私の王位継承は，神の摂理や自然法則に従う正当な世襲である。……」[121]と主張した。すなわち彼は，世襲の権利に基づいて，イングランド王位を要求したのであった。

これに対してイングランド議会は，ヘンリー6世が生きている間はそのままであるが，彼が死んだ後は，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットに，イングランド王位を継承させることを議決した。

だが，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットは，その議決後すぐに，いいかえると議決に従わずヘンリー6世の存命中に，イングランド王位を宣言した。

イングランド王を僭称する3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットに対して，王妃マーガレットは，激怒し，そして北部の大貴族の力を借り，12月末スコットランドから南下した[122]。そして彼女は，1460年12月30日ヨー

119) Hallam, E., *op. cit.*, p. 222.
120) Oman, C., *op. cit.*, p.395.
121) Lander, J. R., *The Wars of the Roses*, Repr. of 1990, ed., Alansutton, 1993, p. 80.
122) Oman, C., *op. cit.*, p. 397.

ク王家軍とウェークフィールドで戦った。この1460年12月30日のウェークフィールドの戦い（Battle of Wakefield）で，彼女のランカスター王家軍は，ヨーク王家軍のソールズベリー伯リチャード・ネヴィルを殺害することによって勝利を得た。その勝利をもとにして彼女は，3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットを断首した[123]。

このことを知った3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットの息子マーチ伯エドワードは，父に代わりヨーク王家軍を指揮し，そして1461年2月2日，モーティマーズ・クロス（Mortimer's Cross）で，王妃マーガレットのランカスター王家軍と対決した。その結果は，ヨーク王家軍の大勝利であった[124]。

モーティマーズ・クロスで大敗を喫した王妃マーガレットは，再度夫ヘンリー6世を救出するために，小規模な軍隊を引き連れ南下し，1461年2月17日，ヨーク王家軍と出くわした。すなわち，第2次セント・オルバンズの戦いである。この戦いで王妃マーガレットは，ヨーク王家軍のうちのウォリック伯リチャード・ネヴィル軍を破り，夫ヘンリー6世の救出に成功した。そして彼女は，この大勝で，ロンドンに入城しようと思ったができなかった。というのは，彼女の軍隊の1部が，北部で報復的な略奪，虐殺行為を行っていたため，ロンドン市民からかなりの反感を買っていたからである。そこで彼女は，ロンドンに進撃することなく，息子のエドワードを連れ，スコットランドに逃げた[125]。これらのことから，ランカスター王家が北部のリテイナーズに給料をあまり支払っていなかったことがわかる。すなわち，王妃マーガレットのランカスター王家は，財政逼迫に陥っていたのである。

1461年2月17日の第2次セント・オルバンズの戦い後，大勝利を得た王妃

---

123) Myers, A. R., ed., *English Historical Documents*, Vol. Ⅳ, 1327-1485, *op. cit.*, p. 286. (Attributed to William of Worcester, Annales Rerum Anglicarum, ed., Stevenson, Letters and Papers, Ⅱ, ii, 775〔Latin〕)
124) Oman, C., *op. cit.*, p. 404.
125) Jacob, E. F., *op. cit.*, pp. 524-525.

マーガレットがロンドン市内に入城できなかった理由を，もう少し考えてみる。というのは，この戦いの結果が彼女の本意でなかったからである。たしかにこの戦いの目的が，夫ヘンリー6世をヨーク王家軍のマーチ伯エドワードより救出することにあった。このことだけだったら十分に成果が上げられ，彼女は満足したであろう。

だが王妃マーガレットの本心は，イングランド政権奪取そのものであった。そのため彼女は，異常なまでも政権奪取にこだわり，執拗なまでも，大貴族を巻き込み，ヨーク王家と対決してきた。もし彼女が，イングランドの政権奪取にこだわっていなかったならば，第1次セント・オルバンズの戦い後，敗北の責任を取り，すみやかに息子エドワードを連れ，スコットランドに引っ込み，歴史の表舞台に現れなかったであろう。

王妃マーガレットの異常なまでもの政権奪取が，大貴族に雇われているリテイナーズにも伝わり，第2次セント・オルバンズの大勝を導いたのである。だが，このリテイナーズは，対ヨーク王家軍に対しては，報復的な虐殺や，各州の市民に対しては，暴力的な略奪を行っていたので，ロンドン市民から恐れられていた。そのロンドン市民の恐怖が，反マーガレットとなり，王妃マーガレットのロンドン入城を拒否したのである。いいかえると，リテイナーズの過激な行動が，王妃マーガレットの夢，すなわちイングランド王権への奪取を打ち砕いたといえるであろう。

これに反してロンドン市民は，マーチ伯エドワードのロンドン入城を歓迎した。

1461年2月17日マーチ伯エドワードが入城したロンドンでは，すぐに議会が開かれた。この議会は，前年議会が妥協したすべての法案を破棄し，ランカスター王家のヘンリー6世を，イングランド王として認めないということを議決した議会であった。いいかえると，この議会は，ヨーク王家のマーチ伯エドワードを，イングランド王にしようとする議会であった。

1461年3月4日イングランド議会は，マーチ伯エドワードを，イングランド王として宣言した。つまりマーチ伯エドワードは，正式にエドワード4世

になれるのであった。その反面，この時点でヘンリー6世の在位は，終わりを宣告されたのであった。

マーチ伯エドワードが，正式にイングランド王として宣言された後，再びヨーク州で争いが起こった。エドワード4世は，ロンドンでのセレモニーを終えた後，キングメーカーであるウォリック伯リチャード・ネヴィルとともに，マーガレット軍を追撃していた。その最中の1461年3月29日に，彼らはタウトン（Towton）で，マーガレット軍と遭遇した。

タウトンの戦い（Battle of Towton）の時，エドワード4世のヨーク王家軍は50,000人[126]，マーガレットを擁するランカスター王家軍は72,000人[127]であった。

ヨーク王家軍は，エドワード4世を中心に，ウォリック伯リチャード・ネヴィル，ノーフォーク公ジョン・モウブレイ（John Mowbray II, Duke of Norfolk）であった。

これに対して，ランカスター王家軍は，王妃マーガレットを中心に，ノーサンバランド伯ヘンリー（Henry, 3rd Earl of Northumberland），デヴンシア伯トーマス（Thomas, Earl of Devonshire），ウィリットシャー伯ジェームズ（James, Earl of Wiltshire），サマセット公ヘンリー（Henry, Duke of Somerset）であった。

この戦いで，ランカスター王家軍は28,000人もの兵士を失い[128]，またヨーク王家軍も9,000人もの兵士を失った[129]。

このタウトンの戦いでは，順調にいけば，兵士の多いランカスター王家軍が勝ったであろう。だが，エドワード4世を擁するヨーク王家軍は，ウォリック伯リチャード・ネヴィル，およびノーフォーク公ジョン・モウブレイの活躍により大勝利を得た[130]。特に，ノーフォーク公ジョン・モウブレイは，

---

126) Ross, C., *op. cit.*, p. 55.
127) Jacob, E. F., *op. cit.*, p. 526.
128) Lander, J. R., *op. cit.*, p. 92.
129) Ross, C., *op. cit.*, p. 140.
130) Oman, C., *op. cit.*, p. 408.

エドワード4世のために最新鋭軍を投入した[131]。

この1461年3月29日のタウトンの戦いで，ランカスター王家軍のノーサンバランド伯ヘンリー，デヴンシア伯トーマス，ウィリットシャー伯ジェームズは戦死，またサマセット公ヘンリーは逃走した。なお王妃マーガレットは，ヘンリー6世およびエドワード王子を連れ，スコットランドに逃げた。

この結果，エドワード4世は，1641年6月28日，ウェストミンスター・アベイで戴冠した。イングランド王に即位したエドワード4世は，若干19歳であった。そしてエドワード4世は，ここにヨーク王朝を樹立させた。その反対に，これでもってヘンリー6世の第1次在位が完全に終わったことになった。

スコットランドに逃げていた王妃マーガレットは，軍事力を立て直し，1464年5月15日ヘクサムで再度，ヨーク王家軍と戦った。このヘクサムの戦い（Battle of Hexham）においても，ヨーク王家軍は圧勝し，ランカスター王家軍は壊滅状態になった。

この戦いでヘンリー6世は，再度捕えられロンドン・タワーに幽閉された。なお王妃マーガレットは，フランスに逃走した。

ヘンリー6世は，1470年10月16日，エドワード4世のキングメーカーであったが，彼の結婚問題を巡り反旗を翻し，しかも王妃マーガレットと同盟を結んだウォリック伯リチャード・ネヴィルによって，ロンドン・タワーから救出された[132]。そしてこのことにより，ヘンリー6世は，再び1470年10月13日に，イングランド王に返り咲いた。

だが，ヘンリー6世は，エドワード4世を打ち負かすだけの軍事力がなく，結局1471年5月21日に殺害された。

---

131) Myers, A. R., ed., *English Historical Documents*, Vol. Ⅳ, 1327-1485, *op. cit.*, pp. 289-290. (Hearne's Fragment, in Thomae Sprotti Chronica, ed., T. Hearne (Oxford, 1719), 286 〔English〕)

132) Myers, A. R., ed., *English Historical Documents*, Vol. Ⅳ, 1327-1485, *op. cit.*, p. 304. (Calendar of State Papers of Milan, Ⅰ, 138 〔Italian〕)

Ⅵ. おわりに

祖父フランス王シャルル6世の血を受け継いだヘンリー6世は，1421年12月6日にウィンザーで誕生した。そして1422年9月1日にわずか9歳で，イングランド王位を継承した。

この時からヘンリー6世にとって不幸な一生が始まった。

幼王であるがゆえに，ヘンリー6世を取り囲む補佐役たちの間で，主導権争いが起こり，彼はその中に巻き込まれていった。またその主導権争いに王妃マーガレットが加わり，彼は自己主張のできない気の弱い人物になっていった。

1453年7月のシャスティヨンの大敗後，かなりの数のカンパニーがフランスからイングランドに撤退することになった。このカンパニーの取り扱いは，ヘンリー6世自身が決定したのではなく，主導権争いをしている白薔薇のヨーク王家である3代目ヨーク公リチャード・プランタジネットと，赤薔薇のランカスター王家である2代目サマセット公エドマンド・ボーフォートとに左右された。

イングランド国内に撤退したカンパニーたちは，それぞれ新しい有能な職業軍人，すなわちリテイナーとして，封建貴族に雇われることになった。このリテイナーズを大量に雇い，そして小軍隊を組織させている封建貴族たちは，主導権争いをしているランカスター王家，あるいはヨーク王家に肩入れすることによって，ヨリ大きな権力を得ようとした。すなわち，王位継承権を巡り，多くの封建貴族たちを巻き込んだランカスター王家（赤薔薇）vs. ヨーク王家（白薔薇）の争い，薔薇戦争が起こったのである。

ヘンリー6世治世の間，この薔薇戦争を長引かせた理由は，重大な政策決定時に，彼が精神異常をきたしたからである。

ヘンリー6世治世までの薔薇戦争は，王侯貴族であるランカスター王家とヨーク王家とが王位継承を巡って争った戦争である。その結果は，ヨーク王

家が勝ち，ヨーク王朝が樹立された。すなわち，この時点までの薔薇戦争は，ヨーク王朝が樹立されるまでの戦争であったということがいえるのである。